

JACET Kansai Conference Report

December 7, 2012

社団法人大学英語教育学会関西支部 (JACET Kansai Chapter)

支部長: 野口 ジュディー (武庫川女子大学) (Chapter President: Judy Noguchi, Mukogawa Women's University)

事務局: 〒603-8555 京都府京都市北区上賀茂本山 京都産業大学 文化学部 第3研究室棟 植松茂男研究室内

(Chapter Office: c/o Shigeo Uematsu, Faculty of Foreign Studies, Kyoto Sangyo University)

E-mail: jacetkansaichapter@gmail.com URL: <http://www.jacet-kansai.org/>

2012年度 JACET 関西支部秋季大会報告

2012年度 JACET 関西支部秋季大会が、11月24日(土)に京都産業大学で開催されました。今大会では、大会の活性化を目指し、学生会員も含めた多くの皆様からのご発表を募集したところ、研究発表が14件、実践報告が12件、公募ワークショップが1件、ポスター発表が4件と、実に多彩かつ、興味深いご発表がいただけました。

午後からは、関西大学の水本篤先生と龍谷大学の里井久輝先生による企画ワークショップが並行して行われ、多くの参加者が熱心に耳を傾けておられました。休憩を挟み、Englishnization Group, Global Human Resources Department, Rakuten, Inc. の YEE, Kyle 氏による、「Englishnization of Japan: Education Meets Industry」の講演が行われ、最後に、「大学英語教育のベストティーチングとはなにか? 各大学の教育賞受賞者が語る『私の授業』」と題して、パネリストの日野信行先生(大阪大学)、柏原郁子先生(大阪電気通信大学)、竹蓋順子先生(大阪大学)より、それぞれ興味深いお話を伺うことができました。

参加者総数は、228名となり、過去最大級の盛況な大会となりましたことをご報告いたします。

The JACET Kansai Chapter Fall Conference was held on November 24th at Kyoto Sangyo University with 228 participants attending sessions presenting 14 research reports, 12 reports on classroom activities, 3 workshops and 4 posters. Two of the workshops were Invited Workshops by Atsushi Mizumoto (Kansai University) and Hisaki Satoi (Ryukoku University). The Plenary Lecture featured Kyle Yee (Englishnization Group, Global Human Resources Department, Rakuten, Inc.). The final event was a Symposium, entitled "What is the Best Teaching Method for College English Education? - Education Award Winners Share Secrets of Their Classes".

JACET 関西支部では、今回の秋季大会の様子を広く支部会員のみなさまにお伝えするために、また、当日、ご参加できなかったみなさまに大会の概要をお伝えするために、今回、試験的に Conference Report を発行することにいたしました。研究企画委員の先生方によるご協力の下、企画ワークショップ、基調講演、企画シンポジウムをそれぞれご報告いたします。この取り組みに対する、みなさまのご意見、ご感想をお知らせいただけますと幸いです。今後の支部活動の参考にできればと考えております。

(JACET 関西支部事務局, 広報)

■企画ワークショップ1の報告■

講師: 水本 篤先生 (関西大学)

「Excelを使った統計解析とグラフ化入門」

“Using MS Excel for Statistical Analysis and Visualization”

60人定員の会場はほぼ満員だった。標準偏差にはじまり、検定のこと、効果量の必要性まで話題が展開した。グラフや表の作成についても、論文編集者の視点から語られ、統計に詳しくない人にも分かりやすく、そうでない人にとっても重要なことが語られた70分のとても短いワークショップだった。統計知識も研究分野もばらばらな参加者に対して、何を語ることが「入門編」なのか、講師の準備の苦勞が偲ばれたが、統計の技術面のWSであると同時に、研究の方法論、論文投稿のあり方の話でもあったところが、どの参加者にとっても有意義な時間になった理由だと思う。コンピューター操作や補足説明に奔走してくれた若い研究者の皆さんのおかげと、講師のユーモアと遊び心で、終始にぎやかであったことも付記したい。

報告者: 今井 裕之 (兵庫教育大学)

■企画ワークショップ2の報告■

講師：里井 久輝先生（龍谷大学）

「カタカナ発音から英語らしい発音へ ～大学生のための効率的な英語発音習得法～」

“Beyond “Katakana English” Sounds – How Can Japanese University Students Learn Natural English Pronunciation Effectively? –”

里井先生お得意のジョークをふんだんに交えた、笑いの絶えないワークショップであった。

まずは日本での英語発音教育の背景として、冒頭で

- 英語らしい発音習得に対する大学生のモチベーションが高いこと
- 日本語発音と英語発音の体系の違い
- 習得発音モデルとして、どの地域の英語変種を提示するか
- **Intelligibility** の高い発音を習得するために、発音記号の知識が必要であること

の4点が提示された後、ワークショップ参加者を交え、カタカナ発音を英語発音に近付けるためのアクティビティが紹介された。

アクティビティは、「楽しく、ゆっくり、着実に」をモットーに、まずはカタカナ語の弊害について、次に発音記号を習得するにあたって整理しておくべき用語について、先生のお話の合間に参加者もいっしょに声を出して音声を確認するという流れで進められた。分節音だけではなく、連続音声に関わる要因としてリズム、ポーズ、イントネーションについての確認のほか、アクセントや、脱落・弱化・同化といった音声変化など、英語の超分節音的についてもまとめられ、総括的に英語発音について考える貴重な機会となった。

盛りだくさんな内容で、70分があっという間であった。ワークショップの内容だけではなく、先生のお人柄を慕う参加者が多かったせいか、急きょ椅子を追加してもまだ満員という、大盛況のワークショップとなった。

報告者：中西 のりこ（神戸学院大学）

■基調講演 (Plenary Lecture) の報告■

Speaker: YEE, Kyle (Englishnization Group, Global Human Resources Department, Rakuten, Inc.)

“Englishnization of Japan: Education Meets Industry”

Mr. Yee is in charge of the Englishnization project at Rakuten. He provided a brief description of Rakuten’s Englishnization, and made a plea for educational changes

and collaboration.

Rakuten made a bold decision to conduct all of its communication in English. As Mr. Yee pointed, there is valuable Japanese business knowledge and skills to be passed down. If it cannot be communicated to people in other countries, this knowledge will be wasted. Thus, Rakuten has taken very stringent measures. The program at Rakuten is very intensive. Mr. Yee showed a schedule filled with TOEIC classes, speaking classes and other English classes designed to help employees reach their goals.

Such an intensive language program shows that Rakuten is serious to be an influencer globally, but it also highlights the lack of readiness of students. Better English skills are needed to be globally competitive. At the same time, critical thinkers, those with good IT skills, good collaborators and those with creativity are needed.

The program used in Rakuten was not the highlight of Mr. Yee’s talk but rather the urgency to get students to think globally. At JACET we need to catch this vision and help reform the education system.

Reported by Virginia Peng (Ritsumeikan University)

■シンポジウムの報告■

「大学英語教育のベストティーチングとはなにか？
各大学の教育賞受賞者が語る『私の授業』」

“What is the Best Teaching Method for College English Education? – Education Award Winners Share Secrets of Their Classes”

パネリスト：

- ◆ 柏原 郁子先生（大阪電気通信大学）
- ◆ 竹蓋 順子先生（大阪大学）
- ◆ 日野 信行先生（大阪大学）

近年、学生による授業評価はもはや珍しいことではなくなったが、一部の大学では、さらにふみこんで、「教育賞」や「ベストティーチャー賞」等を設けて、すぐれた授業実践を顕彰する試みを行っている。

大学英語教育における「ベストティーチング」というのは定義の難しい概念であるが、本シンポジウムでは、実際にそうした賞を受賞された教員の具体的実践を紹介いただくことで、ベストティーチングの方向性を一緒に考えていくことが目指された。

柏原郁子氏（大阪電気通信大）は、学生が各々の意欲・関心に応じて自由に参加し、自分で教材を選んで自立的に学習を行う新しいタイプの授業実践について、竹蓋順子氏（大阪大）は、科学的な理論に立脚する3ラウンド制に基づく授業実践について、日野信行氏（大阪大）は、当日の朝の海外ニュースメディア記

事を使って、多角的な視野を育てながら World Englishes を実践させる授業実践について、それぞれ報告された。

講師が述べられたように、「ベストティーチングの方法は教員それぞれによって異なる」ものであるが、一方で、3講師の実践には一定の共通点も見受けられた。たとえば、1) 教員が facilitator として学生の学びを支援すること、2) 最新の機器を使用するだけでなく、従来型の指導の良さも生かすこと、3) 教員自身の専門研究の成果を基盤として授業を設計することなどは、今後、大学英語教育のベストティーチングを考えていくうえで一つの切り口になるかもしれない。3講師の発表は大変に刺激的なもので、聴衆にとって得るところは非常に大きかったものと思われる。

報告者：石川 慎一郎（神戸大学）

■写真で見る各会場の様子■



【基調講演会場】



【シンポジウム会場】



【企画ワークショップ1会場】



【企画ワークショップ2会場】